

はりつくようなときもありましたが、一生けん命に働きつづけていました。

一年の月日が流れたころには、洞門も四分の三ほどまでに進みました。しかし思ったより作業の進み方がおそく、人夫の数も多くかかったので、村から出る費用は残り少なくなっていました。

工事をうけおった亀五郎は、どうしても完成しなければならないという責任を感じ、自分の土地を売ったお金で人夫に賃金ちんぎんをはらっていました。村の世話人たちも、そのことを知り、村の人たちに役やく（賃金のいらぬ人夫）として毎日数名ずつ出てもらうことにしました。

お盆もすぎた、八月の末、一年半かけて、ついに洞門が完成しました。十月十五日の秋祭りには、村の青年たちによつて豊年踊りが行われるのですが、今年ほどくに、洞門の完成を祝う日でもあつたので、まだ明るいうちから、ふえやたいこの音がひびきわたっていました。

早くから子どもたちが、やぐらのまわりを走りまわり、夕方になると、村人た